

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520005

研究課題名(和文) 知覚行為論の構築 生態心理学・現象学・認知哲学の観点から

研究課題名(英文) An Inquiry into the Perception Act Theory: From a Viewpoint of Ecological Psychology, Phenomenology, and Cognitive Philosophy

研究代表者

小林 睦 (Kobayashi, Mutsumi)

東北学院大学・教養学部・教授

研究者番号：20292170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主として、生態心理学 現象学 認知哲学 における3つの知覚論を比較検討することにより、その異同を分析することを行なった。そうした作業から明らかになったのは、(1)3つの立場ともに、知覚を受動的な感覚の統合ではなく、能動的な行為の連関として理解していること、(2)それにもかかわらず、3つの立場は認識論的に異なる前提を採用していること、である。これらの点を踏まえつつ、本研究は独自の立場から、知覚を「知覚行為(perception act)」として捉え直し、新たに知覚行為論を構築することを試みた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to weigh things in common and differences in three types of theories of perception, that is, ecological psychology, phenomenology and cognitive philosophy. This analysis makes clear the following two points. (1) These theories of perception understand the nature of perception in a similar way, not as passive sensory integrations, but as active behavioral correlations, (2) but despite its similarities, these theories of perception adopt different epistemological premises. On the basis of these results, this study tried to reinterpret the nature of perception, and consider the possibilities of perception act theory.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 哲学・倫理学

キーワード：現象学 生態心理学 認知哲学 知覚行為 反表象主義 直接实在論 イナクシオニズム ギブソン

1. 研究開始当初の背景

本研究は、これまで申請者が行ってきた研究、すなわち、現象学と心理学・認知科学との関係を、知覚の本性にかんする解釈という観点から問い直すことを、その動機とするものである。

フッサール現象学は、19世紀の実証主義に見られる自然主義的傾向への対抗運動として成立し、自然主義の典型である心理学を批判することを通じてその形を整えていった。その点からすれば、フッサール現象学と心理学との結びつきは本質的である。また、フッサール以後の現象学は、その後の生理学・心理学・認知科学との相互的な影響関係のうちで、さらなる発展を遂げている。そうした点を踏まえるならば、現象学と認知科学との結びつきも無視できない。

その意味で、本研究は現象学と心理学・認知科学との関係を問い直すことを目指すものであり、これまで申請者が行ってきた研究を、さらに展開するものである、と言うことができる。

2. 研究の目的

本研究は、現象学と心理学・認知科学との関係を考察するために、具体的には以下の作業を行なうことを目的としていた。すなわち、(1) J.J.ギブソンにより主張された生態心理学(ecological psychology)、(2) E.フッサール、M.ハイデガー、M.メルロ＝ポンティらによって推進された現象学(Phänomenologie)、(3) 近年の認知科学の知見を取り入れつつ自然主義化する認知哲学(cognitive philosophy)、これら3つの知覚論を比較検討することであった。そうすることで、知覚の本性についての解釈を複眼的に考察することができるからである。

本研究は、以上の3つの立場(生態心理学、

現象学、認知哲学)が、知覚を受動的な感覚の統合としてではなく、能動的な行為の連関として理解しようとする点を評価しつつ、それらの異同を踏まえた上で、知覚のもつ「行為性(enactive nature)」とでも言うべき性質を、「知覚行為(perception act)」として捉え直し、新たな観点から「知覚行為論(perception act theory)」を構築することを目的として、主体と世界とのあいだで成り立つ認識基盤としての知覚の構造を明らかにする試みであった。

3. 研究の方法

以上の目的を実現するために、本研究は、(1) J.J.ギブソンにより提案された生態心理学を参照軸としつつ、一方で、(2) 生態心理学とE.フッサール、M.ハイデガー、M.メルロ＝ポンティらによる現象学とを比較検討するとともに、他方で、(3) 生態心理学と近年の認知科学の知見を取り入れつつ自然主義化する認知哲学とを比較検討する、という方法を採用した。こうした方法は、単なる二つの立場の比較ではなく、かつて人類学の分野で提唱された「文化の三角測量(triangulation)」という方法を、思想史的考察へと限定的に適用する試みである。地理上の一点を定めるには、二点間の距離を測るより、もう一点を加えた三点に基づいて計測する方が正確であるように、思想上のある概念(本研究の場合は「知覚」)の意味を理解するために、二つだけではなく、それを相対化することのできる三つめの視点を導入することで、概念の理解をより深めることができるからである。

本研究で比較の対象となる三つの知覚論的な立場は、それぞれが主張された時期に支配的であった生理学・心理学等における知覚観に対して、共通する観点からの批判を行なう一方で、認識論的には大きく異なる立場を

とつてもいた。それゆえ、本研究では、知覚をめぐりいくつかの解釈を、基本的な類型に分類した上で、「知覚の行為性 (enactive nature of perception)」を重視するそれぞれの立場の異同を明らかにする。その上で、本研究では、知覚を受動的な感覚の統合とみなす伝統的な知覚観を批判し、知覚を能動的な行為の連関として把握するために、「知覚行為 (perception act)」という新たな概念を導入し、本研究で言うところの「知覚行為論 (perception act theory)」を構築することをめざすものであった。

「知覚行為論」という構想は、J.L. オースティンの「言語行為論 (speech act theory)」からの類比によって発想されたものであるが、本研究では言語ではなく知覚を主題とするため、その問題関心と方法はおのずから異なる。「言語行為」という場合の「行為 (act)」は、挨拶・謝罪・質問・命令・約束など、発話主体による発話行為を意味するという意味で、マクロな観点から把握されるべきものである。それに対し、本研究で言う「知覚行為」という場合の「行為 (act)」とは、身体全体・四肢・頭部・各器官におけるさまざまな運動の総称であり、眼球のサッケード運動のようなミクロな観点から捉えられるべきものを含んでいる。言語行為が、一個体の発話水準において分析されるのに対し、知覚行為は、個体を構成する身体諸部分の運動水準において分析されるべきものなのである。

しかしながら、言語行為論が、論理実証主義などに見られた言語の記述主義を批判し、われわれの言語活動のうちに事実確認的 (constative) な側面のみならず、行為遂行的 (performative) な側面を見出したように、われわれは自らの知覚活動のうちに、外界確認的な側面だけではなく、行為遂行的な側面をも見出すことができる、と言ってよい。本研究の課題を「知覚行為論の構築 生態心理学・現象学・認知哲学の観点

から」と名づけたゆえんである。

4. 研究成果

年度ごとの研究成果は以下の通りである。

(1) 平成 23 年度 :

研究初年度は、平成 23 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災の影響を踏まえて、当初計画を若干変更し、まず、以下のような研究を行なった。すなわち、フッサールによる未刊草稿「自然の空間性の現象学的起源にかんする基礎研究」(以下「転覆」草稿)から出発して、そこで提起された「大地」概念を、20 世紀の地質学において生じた科学革命という観点から検討し直し、大地における知覚のあり方を分析することを試みた。

晩年のメルロ＝ポンティは、フッサールの「転覆」草稿をふまえつつ、「超越論的地質学 (géologie transcendante)」と呼ばれる新しい研究を構想していた。これは、地球の表層を構成する地殻岩石や地層化石などを対象とする経験的な科学ではなく、人間と世界との志向的な歴史にかんする現象学的な探求、を意味するものである。彼は、晩年の講義「現象学の限界に立つフッサール」の中で「転覆」草稿に言及し、「すべての静止とすべての運動がそこに浮かびあがってくる地」としての「大地」が、「肉」の存在論という観点から、新たに解釈されることになる。

しかし、本研究では、こうした「肉」の存在論へと歩を進めるのではなく、ヴェグナーによる「大陸移動説」、および、その発展形態としての「プレートテクトニクス」の主張を、現象学的な観点から考察することを行なった。そうすることにより、フッサールの「転覆」草稿の視野には含まれなかった、「大地 / 地球」のより精細なあり方を明らかにすることができるからである。その成果は「超越論的地質学の再検討 フッサール「転

覆」草稿を越えて」として発表された。

上記研究と並行して、初年度は当初の計画に沿った研究作業、すなわち、ギブソンとメルロ＝ポンティにおける「存在論」の意味を比較することを通して、両者の知覚理解にかんする異同を明らかにする作業を行なった。

(2) 平成 24 年度：

研究次年度において、本研究がまず試みたのは、知覚行為のあり方を、人間と動物との比較対象という形で、現象学および進化生物学的な観点から検討することであった。そのために、「人間とは何か」という問いに肯定的に答えようとするのではなく、反対に「人間とは何でないか」という問いを立て、その間に対して「人間とは～でない」と否定的に答えることにより、人間の本質を逆照射するというアプローチを採用した。

「人間とは何でないか」と問うことによって、人間と動物との異同を検討し、両者の知覚のあり方にはどのような類似性と差異があるのかを明らかにしようとする、さらに、人間と動物ができることとの距離を計測することによって、「人間とは何か」という問いに間接的に答えようとする。こうした研究の成果は「人間と動物 世界に棲まうことの意味」として発表された。

次に、上記研究と並行して、当初の計画に沿った研究作業、すなわち、ギブソンと古典的計算主義における知覚論を比較することを通して、両者の異同を明らかにする作業を行なった。具体的には、まず、ギブソンの生態心理学的な知覚論に対し、古典的計算主義者であるフォーダー＝ピリシンが加えた批判について改めて検討することを試みた。次に、計算主義によるギブソン批判に対し、ギブソニアンたちが行なった反論の内容を吟味し、知覚の本性にかんする論争の意味を考察する作業を行なった。最後に、以上を踏まえた上で、ギブソニアンと計算主義のあい

だでなされた論争の帰趨を確認する作業を行なった。

(3) 平成 25 年度：最終年度の研究は、当初計画とは多少異なる形で行なわれた。初年度の研究開始直前に起きた東日本大震災の影響で多少変更された研究計画の修正を行なう必要があったからである。具体的な研究成果の概要は、以下の通りである。

前年度までの研究の補足としては、ギブソンとメルロ＝ポンティにおける存在論の意味を比較検討し、両者の知覚理解にかんする異同を明らかにする作業に再度取り組んだ。メルロ＝ポンティにおける「可逆性」と「世界の輻〔や〕」という二つの概念と、これらに対応する類比概念として、ギブソンの知覚論の中に見出される「知覚システム」と「アフォーダンス」という概念を取り上げ、両者が影響を受けたゲシュタルト心理学における「誘発性」や「不変項」などの諸概念との関連において、比較することを行なった。研究の成果は平成 26 年度中に発表されることになっている。

最終年度の当初計画にかんする研究としては、当初の予定通り以下の研究に従事した。すなわち、自らの方法を「イナクティブ・アプローチ」と呼ぶ A. ノエの知覚行為論を検討し、そうしたアプローチからギブソンの「アフォーダンス」概念がどのように再解釈できるかを確認した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

小林 睦、超越論的地質学の再検討 フッサール「転覆」草稿を越えて、フィロソフィア・イワテ、査読有、第 43 号、2011、pp.29～46

小林 睦、人間と動物 世界に棲まうことの意味、思索、査読有、第 45 号(二)、2012、pp.233～256

東北学院大学・教養学部・教授

研究者番号：20292170

〔学会発表〕(計2件)

小林 睦、超越論的地質学の再検討 フッサール「転覆」草稿を越えて、岩手哲学会、2011年9月3日、岩手大学

小林 睦、震災と情報メディア：被災地からの報告(ポスター発表)、国際シンポジウム：大震災と価値の創生、2012年3月9日～10日、東北大学/香港教育学院

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

〔図書〕(計4件)

直江 清隆・越智 貢 編、小林 睦 他、岩波書店、高校倫理からの哲学2 知るとは、2012、pp.57～101、pp.175～178

直江 清隆・越智 貢 編、小林 睦 他、岩波書店、高校倫理からの哲学4 自由とは、2012、pp.179～182

直江 清隆・越智 貢 編、小林 睦 他、岩波書店、高校倫理からの哲学 別巻 災害に向き合う、2012、pp.203～210

浅見 昇吾・盛永 審一郎 編、小林 睦 他、丸善出版、教養としての応用倫理学、2013、pp. 112-115

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

〔翻訳〕(計2件)

岡本 拓司 他編、小林 睦 他訳、丸善出版、科学・技術・倫理百科事典、2012、pp.163～165、pp.397～400、pp.1716～1718

中島 秀之 監訳、小林 睦 他訳、共立出版株式会社、MIT 認知科学大事典、2012、pp.550～554 頁、pp.681～683、pp.1172～1174

6. 研究組織

(1)研究代表者

小林 睦 (KOBAYASHI, Mutsumi)